

いもむし（芋虫） なまず（鱒）

名鉄は、時々思い切った斬新な車両を作り出す。この話は「名鉄の不思議」のテーマとしようか？と迷ったが、「あだ名」としてまとめた。

1935（S10）年当時、名古屋を中心に南東部で営業していた「愛知電気鉄道」と北西部を中心の「名岐鉄道」が合併した。この合併効果を出すための士気高揚策として特急用新造車を作ることになり、旧愛電側には「3400系」が、旧名岐側には「850系」がデビューした。

この「3400系」はS10年当時では、全曲線形状に加え、曲面ガラスの採用、最高時速100kmとかなり斬新で優秀な性能を誇り名鉄はもとより、日本の車両技術の優秀さを世界に広めた名車として後世まで名を残す優秀車両あった。



しかし、その色合いと

左右に曲がるカーブを車体をくねらせて通り抜ける様は、まさしく「いもむし」を連想させることから、このあだ名がついた。



一方、「850系」は通常車両として計画されたが、「3400系」に刺激されて急遽、流線形状が取り入れられたもので、写真では確認できませんが、前方下部に3本の白線があり、これと屋根が前方に

垂れ下がっている、無骨なデザイン、色合いからなどから、あだ名を「なまず」（鱒）とつけられたのである。

なお、その後、全線1500V化され、全線直通運転が可能となり、合併以前のわだかまりは、完全に払拭され、両車両が双方に乗り入れている。私事ながら、昭和20年代後半には、双方ともに準急用にまで格下げされていて、通学に利用させてもらった、思い出深い車両です。